設楽発掘通信

No.59
令和２年
12月号

Web 説明会　続投中！

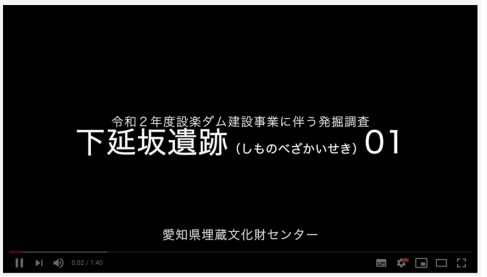
みなさま、もうご覧になられましたか？

愛知県埋蔵文化財センターの YouTube チャンネル。九月に発行した設楽発掘通信56でもおしらせしましたが、十月十九日に、添沢（そえざわ）遺跡と下延坂（しものべざか）遺跡の web 説明会を公開しました。それぞれの動画の視聴回数は、添沢遺跡01が百三十五回、下延坂遺跡01が百四十一回（十一月末現在）となっています。その後も YouTube チャンネルへの動画投稿は続いております。これまでに添沢遺跡について四本（02はB区の遺構、03はA区の遺構、04は古代以降の遺物、05は石器）の動画が追加されています。動画の投稿は、今後も続きます。まずは、添沢遺跡の遺物編をもう一本追加します。また、中止になった昨年度の調査成果報告会「新設楽発見伝六」に準備していた動画をはじめ、過去の「新設楽発見伝」の幕間で上映していた動画についても、掲載していく予定です。

これらの動画については、YouTube サイトで「愛知県埋蔵文化財センター」と検索していただくと、ご覧になれます。また最近では、独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所が運営している「全国遺跡報告総覧」のサイト（https://sitereports.nabunken.go.jp/ja）でも、動画の検索と視聴ができます。こちらでは、全国から投稿された動画も検索・視聴ができます。また「全国遺跡報告総覧」では、日本国内の考古学関係機関から登録された報告書の PDF について全文検索ができたりもします。大変便利なサイトとなっています。考古学の研究者のみならず、考古学ファンのご要望にも答えてくれる頼りになるサイトです。ぜひ、一度ご覧ください。

（堀木真美子（ほりきまみこ））

▲添沢遺跡 Web 説明会 03 より



▲下延坂遺跡 Web 説明会 01 より

▲添沢遺跡 Web 説明会 04 より

△ YouTube
愛知埋文チャンネル

▲添沢遺跡 Web 説明会 01 より

▲添沢遺跡 Web 説明会 05 より

▲添沢遺跡 Web 説明会 02 より

図１　YouTube　愛知県埋蔵文化財センター公式チャンネルより

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査

A区の調査概要

A区では、弥生時代中期後葉の集落跡の調査が終わり、その下層の縄文時代の調査をおこなっています。

現在まで判明している縄文時代の遺構としては、炉跡を伴う竪穴建物跡や石囲炉を伴う竪穴建物跡（写真1）、焼けた石を伴う大型土坑（写真2）、土器を埋設した土坑などが検出されています。

炉跡を伴う竪穴建物跡は、この遺跡では一番古く、縄文時代中期前半（約五千年前）まで遡ります。石囲炉を伴う竪穴建物跡では、炉内から縄文時代中期後半（約四千五百年前）の土器片が出土しています。また、石囲炉は、一方の隅がやや張り出す形状になっていることから、張り出しの部分が副炉となる可能性があります。設楽町内では、同時期の事例として大畑遺跡に類例がありますが、焼土や炭化物がないことから、別の機能も想定されます。時期は、その周辺から出土している土器片から、縄文時代後期前半（約四千年前）と考えられます。

（田中良）

写真1　A区　石囲炉を伴う竪穴建物跡　南から

写真2　A区　焼けた石を伴う大型土坑　北東から

B区の調査概要

B区は、竪穴建物跡が多数検出されているA区の西側に位置し、今回の調査対象となっている上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査区最西端部分にあたります。

調査を行うにあたっては、最も低い場所から掘削を行って行く必要がありましたが、急傾斜地であるため、掘った土や石を落とさず慎重に上に運ばなくてはならず、かなりの難作業となりました（写真3）。

調査区の内、標高の低い部分では、河川の影響で遺構の基盤となるべき土が流れてしまって遺構や遺物は検出されませんでしたが、山側の標高が高い部分では遺構は残っており、遺物も検出されています（写真4）。ただし、A区と違って竪穴建物跡などは検出されておらず、どちらかと言えば集落の縁の部分に当たるようで、B区の位置は、日照時間の短いこの時期になると、午後には西側の張り出した丘陵の影に入って日当たりの無い時間帯が長くなってしまいます。

このような理由もあって弥生時代や縄文時代の人々は、居住に適した地形では無いと考えたのかもしれません。

（鈴木恵介）

写真3　B区　斜面での表土掘削

写真4　B区　上半部の検出状況

C区の調査概要

C区での調査も本格化しました。縄文時代や弥生時代の成果が目覚ましいA区に対して、C区ではより新しい時代の遺構や遺物が見つかっています。C区は全体的に北から南へ下る斜面となっていますが、北東部と西端部に平坦な所があり、そこから建物の痕跡が検出されました。

まず北東部では柱穴列（写真5）が検出されました。この柱穴列は、周辺から出土した遺物から近世のものと考えられます。また、これよりさらに東では竪穴状遺構（写真6）が複数重なって見つかっていますが、そのうち古いものからは灰釉陶器（約千年前）、新しいものからは山茶碗（約七～八百年前）が出土しています。

西端部では柱穴列のほか、上面が平坦な礫（写真7）がいくつか並ぶことが判明しています。これらは柱を支えた礎石あるいは根石である可能性が考えられ、出土遺物から近世の建物の跡と見られています。

（河嶋優輝）

写真5　C区　北東部に並ぶ掘立柱の柱穴列

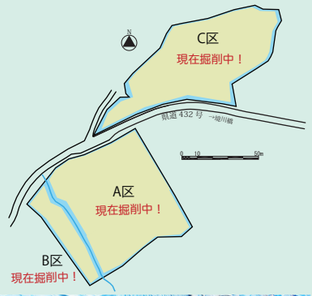


写真6　C区　北東部の竪穴状遺構

写真7　C区　西部の礎石（根石）

下延坂遺跡の調査

B区の調査が終了しました

川向にある下延坂遺跡では、十月二八日に、B区の全景写真撮影を行いました（写真8・9）。

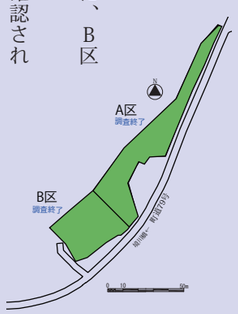
B区で確認された主な遺構は、先月の報告のとおり竪穴状遺構四基、土坑一五基、弥生時代中期後葉の土坑一基でした。今回の調査では、遺構のある面の下を深く掘り下げて遺構・遺物の確認調査も行いました（写真10）。その結果、縄文時代の頃の大規模な土石流の上に堆積した黒色土に遺構面が形成されたことが確認できました。この遺構面では、まず縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての竪穴状遺構や土坑が掘られた集落が営まれ、その後中世の土坑群を掘削する集落があったことがわかりました。また中世前後の時期にも土石流があって、その後に現在の生活につながる盛土や整地が行われたようです。

（陰山誠一）

写真8　B区　遠景　南西より

写真9　B区　全景　上空より

写真10　B区　下層確認調査状況　南東より



胡桃窪遺跡の石囲炉

写真 11　胡桃窪遺跡　(3001SL)

写真 13　大畑遺跡 (871・800SL)

写真 12　胡桃窪遺跡　(3002SL)

写真 14　大畑遺跡 (390SL)

写真11と12は今年度の大名倉地区胡桃窪遺跡の発掘調査で確認された、縄文時代中期後半の竪穴建物跡内の石囲炉です。一方、写真13と14は同じ縄文時代中期後半の川向地区大畑遺跡の石囲炉です。

胡桃窪遺跡の石囲炉（写真11）は、石が手前側の半分程抜けており、左側の一番大きい石は内側に傾いているため、動いた可能性があります。このため、正確には分かりませんが、おおよそ四角形の石囲炉だったと思われ、石と地面に焼けた痕跡が確認されます。石が抜けていたり、動かして傾いているのは、竪穴建物の廃棄に伴う儀礼的なものとして、わざと壊した可能性も考えられます。また、以前の設楽発掘通信57号でご紹介した通り、同じ床面のすぐ近くに、石が全て抜けたと思われる石囲炉？がもう一基見つかっており（写真12）、胡桃窪遺跡では同じような竪穴建物跡が二棟重なった状態で検出されております。

このような例は大畑遺跡でも発見されています。大畑遺跡では二基の石囲炉が隣あって出土しており（写真13）、それぞれの炉を中心として、二棟の竪穴建物跡が重なった状態で検出されました。また、大畑遺跡では円形、あるいは多角形で石を二重に囲っている石囲炉（写真14）も確認されております。同じ縄文時代中期後半の石囲炉でも、異なった形のものが見られる場合があります。

古来より火は信仰の対象であり、火を焚く炉は生活の為の施設というだけではなく、信仰の為の祭壇としての意味合いも兼ねていました。そのため、炉の形や建物内での配置、意図的な破壊行為などの痕跡は、当時の人々の価値観・宗教観を考える上で重要な意味を示すと考えられます。

（渡邉　峻）

設楽発掘通信 No.59
令和2年12月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話 (0567)67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　国際文化財株式会社